

吊いの数

—現代都市における「野生の感覚」を呼び覚ます立体公園墓地—

21819008 大野蓮
指導教員 宮晶子 准教授

量と質	生と死	吊い
リズム	スケール	段差

1. 研究の背景と目的

生きている意味とはなんだろうか。現代都市の中で忙しい生活を送っていると、物事をより便利に効率的に進めることが一番になり、結果、一層慌ただしく単調に陥り易く、私はそこに埋没しがちになる。私が生きていることを実感する時、それは例えば大好きな音楽に触れている時間。音の流れに身を任せていると、自分自身の中に潜む「野生の感覚」とでも呼ぶべきものがざわざわと沸き立つ。他者の楽器が生み出すリズムに飛び込んでついでに行こうとしているうちに、自分自身がリズムそのものになって「今」を刻んでいる、そんな経験がこれまでに幾度となくあった。

昨今のコロナ禍では、ステイホーム生活を余儀なくされるなかで、山や水辺に出かけたり、植物を育てたりなど新たなことに挑戦したりする動きが見られた。これらの行動が求めるステイホーム生活で足りない「何か」も、野生の感覚と無関係ではないように思う。

野生の感覚は自然に触れることで喚起されることもあるが、私の場合の音楽体験のように必ずしも野山を駆け回るような原始的なものとは限らない。「野生の感覚」は人間の根源でもあり、生きる意味と繋がっている。

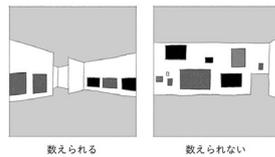
2. 数えられると数えられない

哲学者ベルクソンの「量と質」の考えをもとに、現代の都市に生きるわたしたちが「野生の感覚」を呼び覚まされる状況を生み出す手がかりを探った。

わたしたちの意識には物事を量的なものとは質的なものに捉える2つの側面がある。量的なものとは定量化できる、すなわち机の上にあるものを数える時のように数えられるもの、一方で質的なものは定量化することが難しく、時計のない場所で過ごす時間のように数えられないものとも言える。

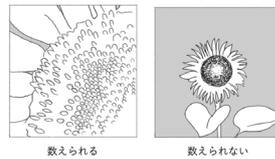
私自身の経験から野生の感覚が掻き立てられるなど感じる場面の分析でも、数えられるものと数えられないものに分けられることがわかった。また、数えられる/数えられない、を分類する軸として、リズム、スケールの要素が挙げられると考えた。

<リズム>



規則的に並ぶことで数えられる単調なリズムと、不規則でグルーブのある数えられないリズム

<スケール>



一つ一つの粒まで数えられるスケールと、全体がぼんやりと数えられないスケール

数えられるものと数えられないものは、両者の違いを認識して初めて生まれる関係であり、この違いに気づく時、両者を行き来する瞬間が、わたしたちの意識に揺らぎを与え、「野生の感覚」を呼び覚ますと言えるだろう。

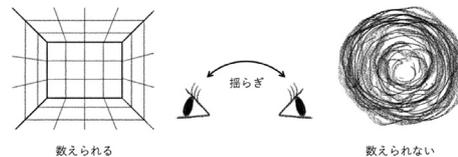


図 1 数えられると数えられない

3. 吊いを開く

少子高齢化、家族の形の多様化が進む日本において、自身が亡くなった後吊ってくれる人がいない、地方に墓があっても縁が薄い、同性婚などのパートナー同士で墓に入りたい、墓の手入れも難しいなどの状況が顕在化しつつある。

代々の家単位の墓に代わって、近年、都心で増えているのが、個人や世帯単位を収める、ビル型のロッカー式の納骨堂である。ロッカー式納骨堂は室内にあり、ゆかりのある参拝者だけが、偲びたい故人のロッカーを目指して参るため、機能的である分、閉鎖的なシステムである。吊ってくれる人がいない場合にとって、適切な場所とは言い難い。

法的に結婚した男女が軸とは限らない家族の形、外国人、ひとり身など多様なバックグラウンドの人々が混じり合う社会において、誰もが見守られながら眠ること

ができる吊いの場があってよいのではないか。
そこは、大事な家族や知人を偲ぼうと足を運ぶことができるだけでなく、何も知らない若者も通りがかりに過ぎ去った大勢の人の軌跡を一瞬でも思い遣る記念碑のような、あるいは休憩に立ち寄り過去に思いを馳せる公園のような場所になるだろう。

4. 量と質と吊い

吊いについて、数えられるものと数えられないものの関係をみでみる。

墓地で墓の一つに参り、他界した故人をひとりひとりが偲ぶ。これは数えられる吊いである、一方で、墓所では、その領域に踏み込んだ時点で、一人一人が大切に吊いが膨大に集積する歴史のようなもの（数えられない）に向き合うような感覚がある。これは数えられない吊いとして認識できる。この、吊いをめぐる、数えられる/数えられない、の認識を促すことができれば、「野生の感覚」を触発できるのではないかと考える。

5. 設計

数えられるものと数えられないものを跨ぎ、「野生の感覚」の体験のきっかけとなる、吊いの場を設計する。

5-1 敷地



図 2 敷地周辺の航空写真
(Google Earth より引用 2021年12月2日閲覧)

敷地は、現在渋谷モディ(旧マルイシティ)が建ち、公園通り沿いの三叉路に位置する。都市の中心部であり交通の便が良く、文化の発信地として様々なバックグラウンドを持つ人々が入り混じる可能性を持つ。また、アイレベルでの体験として、渋谷駅周辺の幾何学的で数えやすい建物群から、代々木公園・明治神宮の有機的で数えられない森にかけて、スケールの変化があり、その過程の真ん中に位置するという理由からこの場所を選定する。

そして現在行われている渋谷再開発により計画された宮下パークや渋谷スカイなどとともに空中で新しい渋谷の風景づくりを担う場所として本制作が参与することで、吊いの場も都市における日常的な風景の一部となることを想定する。

5-2 構成

生と死の体験をつなぐために、果てしない時間的な奥行きをもつ螺旋の形を軸とし、空間的に地面に近いレベルでは生ける者の空間(公園)が広がり、天へ向かうにつれ死者のための空間(墓)が姿を表すというように2つの螺旋が領域を変化させながら絡み合っていく。



図 3 生と死の螺旋

5-3 手法

野生の感覚が掻き立てられる場面の分析から得られた、リズム、スケールの2つの軸を起点に設計する。その基本となる吊いのモチーフとして段差を用いる。踏面が大きい段差は人が上へと行くため階段となり、踏面が小さい段差は石を積み上げる伝統的な墓の形態を想起させる。この違いを設計に取り入れることで数えられる体験と数えられない体験が生まれる。



図 4 階段と墓

<リズム> 蹴上げの寸法が同じでも、踏面の幅が変化することで、傾斜角度が異なりズレが生じる。ズレが起きては、また合ったり、異なるリズムが戻ったりすることで、お墓参りに色々な方向、居方が生まれる。

<スケール> 死者の居場所を段差に組み込み、それが積層することで収骨される各個人の墓であると同時に構造物全体が吊いの場となる。自身にとって大事な人がここに眠っている場合は、その人と向き合う時間を持てる。その上で、吊いの場が個人を超え、建物、都市とスケールを跨ぐことで、特に関係のある人が眠っていなくとも、生きる意味を考える場所として、近くから、そして遠くから吊うことができる。

主要参考文献

- 中村昇著『バルクソン=時間と空間の哲学』講談社 2014年発行
- 井上理津子著『いまだきの納骨堂』小学館 2018年発行